

第1回 幼児期までのこどもの育ち部会	参考資料
令和5年5月16日	6

幼児期までのこどもの育ち部会 御中

2023年5月16日

認定NPO法人児童虐待防止全国ネットワーク理事
高祖常子

意見書

1. 部会名称について

「幼児期までの…」と言うと、就学前までで切ってしまうような印象があり、有識者懇談会で議論された中にもあった「妊娠中から」と言うニュアンスも伝わりにくい。秋田委員提案の「こどものはじめの100か月の育ちを支える（ための）基本的な指針」に賛成します。

2. 未就園児の支援について

政府から「こども誰でも通園制度」と言う案が出されており、未就園児の支援にとっても重要。しかし、現在不適切保育なども言われており、また現状では一時預かりを受け入れる余裕がない園も多く、都心部では特に保護者が探すのに苦労している。園自体が通常保育と同時に一時預かりや「こども誰でも通園制度」を受け入れる体力がないように受け取れる。配置基準も見直される方向だが、予算措置含め、園の体制の整理が必要ではないか。

3. 「こどもファスト・トラック」の考え方を広めていく

子連れの人が施設などに優先的に入場できる「こどもファスト・トラック」が国の施設を中心にスタートしている。欧米ではマーケットの駐車場の一番便利な場所に障害者とファミリー向けの優先エリアがあるが、日本も企業などにも協力を呼びかけ、当たり前の風景にしていくことが大切。そうすることにより、こども真ん中の意識が広がることにもつながる。

4. 子どもの声は騒音ではないという理解を広げる

国会では「子どもの声を騒音ではないとする法律」の必要性が話題になっている。先日、「子どもの声は騒音か」という某番組の討論に参加したが、騒音と思う人たちの一面的で根強い言論に触れた。子どもの声はずっとうるさいわけではなく、子どもの育ちを一般の人たちにも知っていただき、理解を広げることが欠かせない。

5. 子どもの権利を知り、声を聴くことが当たり前の社会に

子ども期の逆境的体験は、ポジティブで保護的な体験（家庭での安全・安心、家庭での対話・コミュニケーションほか）が、それらを改善させるという研究が次々と発表されている。保護者や周囲の大人が子どもたちに安心・安全な環境を用意し、子ども自身が年齢に合わせて子どもの権利を学び、園はもちろん家庭、社会でも、子どもの声を聴く関わりが当たり前になっていくような教育やツール、啓発が必要と思う。